

A-3 食物選択の豊かさや献立の多様性・食事パターンの変化(東京都内の場合)
食糧学院 ○森 雅央・相模女大食物 小泉典子

〔目的〕高度経済成長期から一転して不況期と称される1974年の都市における食物選択の動向・物価高の中で献立の多様性を保ち、食事パターンをどのような形にしようとしているか、主として東京23区内に居住する一般世帯の主婦の意識を確かめるため本調査研究に取りくんだ。

〔調査方法ならびに集計〕調査対象は東京23区内の上記の主婦で、サンプリングは二級系統抽出により調査地25、調査依頼数400、回収数265、有効回収数233(58.3%)のアンケートを得た。調査用紙の主な記載事項は、被調査世帯で食べたり飲んだりしたものをすべて記入してもらい、それをもとに食べた人(世帯主・主婦・子供など扶養家族)を集計し、外食や欠食の場合は除外し、あくまでも家庭内の食事パターンと献立を集計した。本調査は1974年5月22日より5月31日までの10日間の食事を対象とし、パーセント算出の母数Nは基本的には献立記入者×10日間で、朝食・昼食・夕食およびその計と、間食・夜食のそれぞれを集計した。クロス集計は主婦年代別のみを行なった。

〔結果〕本調査の中で主食形態をコメを中心とする食事パターンと献立の変化を見ると各年代とも夕食のコメの摂取率が87.2%から95.5%と高く、料理itemの夕食出現率での変化は昭和46年の食品産業センターの調査と比較すると増加傾向の認められたものは「汁もの」「焼きもの」「漬けもの」「揚げもの」「炒めもの」「そのまま＝調理済食品」「生野菜」などで、減少しているものは「茹でもの」「アルコール飲料」などである。